

インタビュー

全国をリード 広域水道の使命を果たす(1)



八戸圏域水道企業団副企業長
古川 熱氏に聞く

八戸圏域水道企業団は、昭和61年(1986年)八戸市を中心として、11市町村(当時)を「水平統合」した末端給水型広域水道である。八戸水道時代から、田辺一政氏(故人)の強いリーダーシップの下、八戸市周辺の弱小水道を統合して広域水道を実現すると共に、管路の耐震化の先鞭をつけた。今、全国の中小規模水道で解決しなければならない課題を、半世紀も前から着手し、それを発展させながら日々と構築してきた八戸水道の実質リーダー・古川熱氏にインタビューした。なお、昨年は企業団の副企業長の榎本善光氏が急逝するという不幸に見舞われたが、水道生え抜きの技術者である古川氏がバトンを受け取った。常に次世代のリーダーを育成してきたのも、八戸水道の強さである。

(水道ネットワーク通信 有村源介)

「東北みずの会」での講演が始まり

— 昨年は八戸水道にとって、そしてご自身にとっても、副企業長である榎本善光氏の急逝という非常事態を受けて、副企業長に就任されました。様々な思いがあったと推察されますが、その前後のお気持ちを。

— その頃、もしかしたら、ご本人は内々で覚悟されていたかもしれませんね。



東北みずの会設立講演会で。当時は北奥羽広域水道総合サービス社長だった

古川 昨年4月に開催された「東北みずの会」から講演依頼があったことが始まりでした。八戸圏域水道企業団が考えている広域的な連携について、講演依頼がありましたが、榎本さんの体調が悪くて難しいので、自分に代わって行ってこい、ということでした。当時、私の立場は、企業団を退職して北奥羽広域水道総合サービス株式会社の社長という立場でした。それでもいいですか、と言ったら、いいという返事でした。そういうことで私が代役で講演したのですが、今となっては、それが最初の動きとなりました。

— その頃、もしかしたら、ご本人は内々で覚悟されていたかもしれませんね。

古川 体調がよくなかったのは間違ひなかったのですが、私たちは復活してくれるのではないかと期待はしていました。病状が悪くなっているということを人づてには聞いていましたが、4月に「みずの会」の講演に出掛けた時には、まさかこうなるとは思ってもいませんでした。

チームワークが水道を支える

— かつて、榎本さんが急な人事で北奥羽株式会社社長から八戸圏域水道企業団の副企業長として戻られた時、異例の人事として驚きをもって受け止められたのですが、そのような人事の道を作られたことが、今回、古川副企業長がスムーズに誕生したのかなという気もしました。

古川 結果論ですね。榎本さんの前の副企業長は大久保勉さんが4年間勤められて、その次に榎本さんが北奥羽株式会社から副企業長で来て1期4年勤められた。2期目の1年目で交代となりましたが、2期8年間やってほしかったというのが我々の気持ちでした。

水道は24時間浄水処理を行い、途絶えることなく水を送り続けています。安定給水のために24時間、仕事を続けており、それを支えているのが、技術的にも事務的な仕事も含めて、総合的な力です。電気、化学、土木、法律、経済と、総合的に勉強した職員たちが頑張っています。今企業団の職員は155人ですが、やはり水道の最後の砦はチームワークです。これが良くなければ、何事も上手くいきません。公益的な事業はどんな仕事もそうかも知れませんが、特に水道はそれが重要です。災害など、非常時には特にそうです。チームワークを乱すことがあっては、水道は円滑に給水できない、ということが根底にあります。

電気技術者として水道へ

— ここで、ご自身の経歴についてお訊ねしたいと思います。専門分野は……。

古川 地元・八戸の出身で、実業高校で電気分野の勉強をしていたので、そのまま日本大学に進んでからも電気の勉強を継続していました。

いずれは地元に帰りたいという気持ちがあったので、帰るとするならば公務員だろうというのと、当初からありました。当時は田辺一政さんが



「東北みずの会」の訪問を受ける

水道事業管理者でした。

— 田辺さんは一時、八戸市の総務部長も兼任されていたことがありますよね。

古川 そうです、すごい人ですよ。青森市の水道で大変な実績を残されて、八戸市に請われてきた方です。私は1978年(昭和53年)、八戸市に採用され、水道は浄水場の電気関係の施設もたくさんあるということもあって、水道分野に進むということになりました。入局の時、田辺さんから辞令をもらったのですが、「水道は非常に特殊なところだよ、頑張りなさい」と言われました。電気技術者として、駆け出しの私としては、田辺さんが、当時そんな凄い人だと私は思っていませんでした。

— 1968年(昭和43年)の十勝沖地震が、八戸市の水道の在り方を大きく変えたと伺っています。

古川 十勝沖地震によって、水道管がめちゃくちゃに壊れました。それで強い水道を何とか作りたいということを目標に掲げて、クボタさんとタイアップしながら耐震管を開発しました。私にとっては、後から分かったことです。入局直後は漏水防止の仕事でした。当時は漏水防止にも力をいれなければいけない時代でした。

すべてに厳しかった田辺一政氏

— 昭和40年代終わりから53年くらいまでの間は、赤水や漏水の問題が深刻だった時代でした。

古川 そうです。漏水防止係があって、スタートした時の人は、東京都水道局にいて漏水防止を勉強し、それを八戸市に活かしました。

— 八戸から東京水道に行くという発想が凄いですね。